

母校に赴任して

旧職員 澤 田 安 之

私は、平成三年四月から平成八年三月までの五年間お世話になりました。母校である山城高校に転勤が決まり、素直に嬉しく思うと同時に、母校のために、後輩となる生徒のために、しっかりと貢献しなければいけないと重く受け止めました。生徒達は、我々の時と同様に、山城高校に誇りを持ち、自信を胸に元気に高校生活を満喫しているように見受けられました。放課後もグラウンド、体育館、教室で、部活動に一生懸命に取り組む姿がありました。

赴任して、驚いたことの一つに、定期考査時には身分証明書を机上に置かなければ受験できないという規則が依然として生きていたことです。自分たちの高校時代には、確かにその規則があり、遠い記憶の中にあつた受験時の身分証明書が、まだ生きていることに非常に驚きました。身分証明書を忘れたり、紛失した生徒は、考査直前に「仮身分証明書」の発行を生徒指導部に申し出なければなりません。考査中の始業前の生徒指導部

は、慌ただしい時間となっていました。一般的に面倒な規則に對しては、不平不満の声が出てもおかしくないと思われるのに、生徒は緊張感を持って遵守していく姿勢を保持していました。これが無ければ受験出来ないという重大な結果が待っているとはいえ、「権威」のある規則でした。

先生と生徒の間の心理的な距離感も、我々の時代と同様に、近いものがあつたように思いました。距離感が近いと、ややもすると馴れ馴れしく、礼を失する事象も心配されますが、立場の違いをわきまえていた生徒が多かつたように思います。特に、部活動の生徒は、目的意識を堅持し、顧問の先生の指導に頼るのではなく、自主、自立の精神が旺盛で、自分がやらなければという意識が高く、そのことが立場の違いをわきまえることに繋がっていたのではないかと考えています。

陸上競技部の顧問として、またOBとして、微力ですが力を注いできました。幸い部員数も多く、部活動と勉強の両立に懸命に努力してくれました。中でも、男女の駅伝チームの存在は、山城高校の陸上競技部をアピールできたのではないかと考えています。

このように母校山城高校での五年間は、貢献できたかどうかは疑問ですが、校長先生初め、多くの先生方、そして何よりも、かわいい後輩である生徒達に支えられ、大変充実したものでした。感謝の気持ちで一杯です。